

新生匠瑳戦略会議（第2回里山・檀林部会） 会議録

開催日時：平成24年9月12日（水）

午後7時20分～9時20分

開催場所：匠瑳市役所議会棟第3委員会室

出席委員：（学識経験者）渡辺新

（団体推薦者）宇野充紘

（一般公募者）永野亮太、林暁男、八木幸市

（5人／名簿順）

欠席委員：（団体推薦者）萱森孝雄

（1人／名簿順）

市出席者：（事務局/企画課）小川課長、大木副主幹、富井副主査（3人）

1 開 会

2 あいさつ（永野部会長）

（省略）

3 議 事

（1）里山・檀林の問題点の整理と方向性について

[議長]

本日配付している資料は、前回の議論を自分なりにまとめたものです。①里山・檀林を活用した体験型アクティビティスポットを作りたい、②次世代にも残せるような自然と科学が融合した場所にしたい、ということで、コンセプトは「自然と共に生きる」とし、その下に図でまとめてみました。飯高檀林は元々学問所だったということから、「教育」の場として農業体験、炭作り、これから活躍していく人たちのステージとして活用していくこと。それから「文化・自然」として、古き物と新しい物の融合、自然と人間の融合、最先端技術の体験ということで、野栄地区で行なっている無農薬栽培や大学の研究場所として提供してみてもどうかという意見が出ました。また、「健康」というキーワードで、都会の生活から開放されて五感を研ぎ澄ますような体験、

空き家を活用した田舎暮らし体験、そういう意見が出ました。そして、このコンセプトに共感してくれた人たちを巻き込んで新規参入を支援したり、キッザニアのように企業、農家、大学などが各々の力を使って楽しんでいただく、このような内容だったと思います。前回のまとめを冷静に見つめ直してみましたが、私もこの間、いろいろ調べてみました。エコツーリズムなどは全国どこにでもありますが、実際にうまくいっているのかどうか、他とどのように違うのか、何回でも行きたくなるような場所か、どのターゲットに対してどんなサービスを提供していくのか、このようなことを外からの目線、つまりお客様目線で本日は考えてみたいと思います。

[A委員]

前回欠席で申し訳ないのですが、エコツーリズムというのはどういうものですか。

[委員長]

グリーンツーリズムとしてとらえて問題ないと思います。

[議長]

地域ぐるみで自然環境や歴史文化など、地域の魅力を観光客に伝えることで、その価値や大切さが理解され、保全につながっていくことを目指すしくみです。その中で、自然体験や農業体験などが事業として取り組まれています。

[A委員]

エコツーリズムは、都心から離れている人にとってはあまり魅力を感じないと思います。毎日都市の生活にどっぷりつかっていて、木や畑のある生活が新鮮に感じる人にとっては魅力的だと思います。有名だから行ってみたいというレベルでは、1回の訪問で終わってしまうと思います。万人受けという考え方も大事ですが、何回でも行きたくなるというのは、興味があって非常にマニアな人の心をくすぐることができるかどうか、こちらの考えの方が大事なのかもしれません。また、空き家の話題が出ていましたが、空き家を借りる場合、所有者が近くに住んでいなかったり、相続で権利関係が複雑になっていたり、非常に難しい部分もあります。

[議長]

都市部の方を対象にするとしたら、神奈川・栃木・群馬方面に比べると、東総地域は交通アクセスがあまりよくありません。こちらに観光客を連れてくるとしたら、よほどいいものを作ったり、アピールの方法を考えたりしないと厳しいと思います。

[A委員]

千葉に来るとしたら、銚子、九十九里、晩秋の紅葉などがあげられますが、紅葉は他地域と比べて千葉の紅葉が遅いので、他に行けないという消極的な理由から来るのです。そういうものではなくて、これは千葉にしかないから千葉に行くというような、

そういうもので人を呼び込みたいですよ。私もキャンプが好きでよく行きますが、他県の方に聞くと「千葉の南の方はキャンプ施設がけっこうあるけど、北東部はあまりないよね」と言われます。また、アウトドアが好きな人は、充実した設備より山中の雰囲気や自分たちで自由にできることの方が魅力に感じるそうです。飯高周辺でそういう施設があればいいのですが、現在の飯高檀林は一般の人が気軽に足を運べるスポットにはなっていないと思います。市民も「最古の大学があった場所」として認識しているレベルで、もっとアピールできる場があればと思います。

[議長]

先ほど、「何回でも行きたくなるか」という話をしましたが、まさにこういうことだと思います。ここを考えていかないと、最初だけ盛り上がりただけで、長続きはしないと思います。B委員いかがですか。

[B委員]

資料のとおり、お客様目線で考えてみたときに、匝瑳市の里山にどんな固有の資源があるかということ、まず飯高檀林があると思います。では、この飯高檀林をどのように活用していくかということですが、例えば、8月の下旬に松戸から来た友人が飯岡に宿泊しました。そこでは夕日がきれいに見えるスポットがあって、「今度は富士山が見えるときに来たい」と言っていました。翌日、「せっかく来たのだからどこかに行こう」ということで、旭にある大原幽学記念館に行って、その後に飯高檀林に行こうと思っていたのですが、あまりの暑さに飯高檀林には行かず、そのまま帰ることになってしまいました。飯高檀林のことを知っていたら、本当は涼しい場所なので、いろいろ案内の方法があったと思いますが、やはりあまり知られていないのです。知らない人に魅力をどうアピールするか、リピーターを増やすにはどうしたらいいか、それらを考えた上で観光資源として活かせるか、観光案内所も常に人がいるわけではありませぬので、人を受け入れる体制の整備も必要ではないかと思います。先ほど、宿泊施設としてキャンプ場の話が出ましたが、確かに飯高周辺にはありません。前回の部会で空き家の話も出ましたが、空き家の活用というのは所有者の問題もありなかなか難しいと思います。宿泊施設の整備として考えれば、前回、エコ特区の話をしてきましたが、冬は薪炭を使った薪ストーブが使えるなど、四季を通じて人が集められるしくみを作る必要があると思います。このように、何回でも行きたくなるような場所にするにはどうしたらいいのか、多くの人を受け入れるにはどんなものが必要なのか、それは既存のもので対応できるのか、いろいろ考えていかなければなりません。

[A委員]

キャンプ場に来るような人は、あまり計画を立てて来るわけではなく、けっこう行

き当たりばったりで旅行します。宿泊するキャンプ場だけ決めて、後はそこへ向かう道中、気になったところに寄るというスタイルです。先ほど薪の話が出ましたが、薪が無料で使えるというのも一つの魅力になります。県内でも3ヶ所ほど薪が無料で利用できる施設があり、そこは常に人が入っています。

[議長]

委員長いかがですか。

[委員長]

先ほどから、人をたくさん呼び込むという観光の視点で議論していましたが、外から来る人たちの活動を利用することはいいのですが、それだけで里山は再生しませんよね。まず、こういう視点に加えて、里山をどうやったら再生できるのか、昔の農業に戻るわけにはいきませんので、新しい人間と自然の関係を作らなければなりません。その際に、NPOで農業体験を行うとか、困りものになっている竹で炭を作り、その炭を市内キャンプ場でバーベキューに使うなど、内部から作り出されるものと、外から来るものを融合させるようなものであるべきだと思います。もうちょっと匝瑳市域を広く見たときに、人々の生活とか産業などを関連させる中で里山再生につながるような、そういうシステムの中で観光客と結びつくようなことができないかと考えています。炭焼き、バイオマス、それに植木と畜産農家がありますので、余っている堆肥で堆肥センターのようなものができないかどうか、そういう大きな地域全体のシステムを作る中で里山を位置づけたいと思っています。里山に興味がある人は、教育、文化・自然、健康にも興味があると思いますが、地元の人にとっては困りものをどう利用するのが問題です。その際に外からの視点や力が必要になってきますので、中間報告のしくみもここで必要になってくると思います。まず、外から人を呼び込むという視点に立つと、地域で生活している人と地域の産業からみた視点は異なるので、それらを編成替えしていくことが必要です。林業組合長は椎茸と栗は採れると言っていました、おそらくそんなにすごいものではないと思います。ただ、品種改良で努力を続けていけば良いものができるかもしれません。

[A委員]

椎茸はけっこう採ることができます。これは山ではなくても、自宅の庭で栽培することができます。南房総の方では、杉林の中で間伐材に菌種を打って放置するだけなのですが、それを自然のミストで育てて売っていると思います。やっていることは一緒だと思いますが、原木を使って作るものとそうでないものでは、キノコの味が全然違います。椎茸が嫌いな人は、その独特の臭さが苦手という人が多いと思いますが、採って数時間以内のものはその臭さもなく、バターでソテーにしたものは最高におい

しいです。

[委員長]

A委員が所属しているJA青年部では、市内で何か新しいものを作ったり、特産化する動きなどはありませんか。

[A委員]

一応ありますが、やはりネギが中心です。良いネギを作るにはどうしたらいいか、どうやって販路を拡大するか、そういうことがメインになってしまいます。青年部員の9割がネギ農家なので、どうしてもネギ中心の活動になってしまいます。トマト、キュウリも一部ではありますが、この地域ではネギの栽培が一番安定しているということになります。

[委員長]

林業組合長から、大利根用水を利用せず、山から引いた水で作っている米があるという話を聞いたのですが、これは味が違うのでしょうか。

[A委員]

味は違うと思います。私の親戚にも、山の水で米を作っている人がいますが、水源を持っていないと作ることはできません。

[委員長]

そういうお米をもっとアピールした方がいいと思います。

[議長]

先日、A委員と話をしているときに、この地域にはおいしい作物がいっぱい作られているのに、それを上手に食べる工夫がないし、現物としてそのまま出荷しているので、その物の良さが伝えられていないのではないか、という話をしていました。

[A委員]

千葉県は農業にとって気候が適しているのに、山間部に比べてそんなに努力しなくても良いものが作れて、さらに高く売れてしまいます。地元で流通することなく出荷されてしまうので、地域で工夫した食べ方が開発されていないようです。以前、C委員が「いまだにカツオはニンニク醤油で食べる方法しか知らない」と言っていました。カツオの食べ方は、もっといろいろあるそうです。

[委員長]

A委員が作っているネギは、匝瑳市内で購入することはできますか。

[A委員]

匝瑳市内では売っていないと思います。

[B委員]

飯倉台にあるJAの直売所では売っていないのですか。

[A委員]

基本的に農協の検査を通さないと、ひかりねぎのブランドとして出荷することができません。飯倉台の直売所は、農家が直接持参しているのです、ひかりねぎにはなりません。ひかりねぎにならない規格外のものを、直売所に持っていくことはけっこうあります。

[委員長]

報告を受けたときにも思いましたが、ひかりねぎではなく「そうさねぎ」にはなりませんか。

[A委員]

難しいと思います。ひかりねぎというブランド名は、全国でも知名度があります。毎年、ひかりねぎの視察で全国からネギ農家がやってきます。ひかりねぎの管内で、ネギの種苗メーカーは10社ほどありますが、まだ研究段階のものも含めて、全部同じ条件で植えて品評会を開催しています。この品評会を開催しているのは、全国でひかりねぎだけです。その際に、全国の種苗メーカーが一堂に集まるので、ここで良さそうな品種を見定めます。これは、国や千葉県、近隣の埼玉県、茨城県でもやっていなくて、千葉県の匝瑳市と旧光町で行っているのです。

[委員長]

一般のネギとひかりねぎでは、どこが違うのですか。

[A委員]

味、安全・安心はもちろんのこと、かたちの揃いが違います。農薬のチェックも厳しく、農協、市場、小売店でもチェックします。もし、そこで違反が見つければ全て廃棄され、ひかりねぎ部会からも除名されてしまいます。非常に検査が厳しいので、その分、生産者は責任を持って良いものを作ろうとしています。

[B委員]

ひかりねぎというブランドができてから、どのくらい経っていますか。

[A委員]

30年～40年ぐらいになると思います。白浜、東陽、南条、日吉が合併し、旧光町が誕生したときに、ひかりねぎというブランドができました。千葉県とひかりねぎ管内、それと栃木県の大田原市は、ネギの国指定産地になっています。

[議長]

地元で消費することはできませんが、全国では非常に知名度がありますね。

[委員長]

商店街復権部会でD委員が「地元で採れたトウモロコシが地元の大型店で売っていて、なぜこれを商店街でやらないのか」ということを言っていました。地元で売ろうとは思っていないのですか。

[A委員]

個人的には食べてもらいたいと思いますが、一般のネギと比べて価格が高いため、ほとんど買う人はいないと思います。もちろんコストがかかっているため値段も高くなってしまっているわけですが、売りたいと思ってもスーパーに並んでいるネギの方が安いので、皆さんそちらを買ってしまうと思います。

[委員長]

ひかりねぎは独自の出荷ルートがすでにあるわけですが、ふれあいパークのように地域内で流通させる出荷ルートもありますので、これらをもう少し整理したいと思っています。ここに里山が何か結びつきませんか。

[議長]

先ほどの話を聞いていて、自分で作った野菜などを、自分で作った炭でバーベキューをして食べて、木質チップで暖をとるなど、自ら作ったもので生活全てを体験できる場所があったら面白いと思いました。

[A委員]

県内のどこかに、そういうキャンプ場があったと思います。オーナーの厚意で、無料で収穫したり食べたりすることができますが、そういう施設はとても魅力的ですよ。高知県では、夏休みに子どもたちだけを集めて自然体験させる事業をやっていたと思います。そこでは、大人の手は一切貸さず、テントを張ったり食事を作ったりすることを、全て子どもたちにやらせています。それらの体験を農業や里山、自然体験と関連させて事業を起こすことができれば、とても面白いと思います。せっかく匝瑳市は、世界一のトウキョウサンショウウオの生息地になっているわけですから。

[委員長]

生物多様性で利用するエリアもあれば、炭焼き、バイオマス、農業体験で利用するゾーンも作るなど、十分考えられることだと思います。

[議長]

そういう場所として利用できそうなところは、市内にどのくらいあるのでしょうか。

[A委員]

以前、E委員が言っていますが、実際に山を放棄している人へ「貸してくれ」と言っても、あまり貸したがるようないです。だからといって、このまま放っておいたら荒れ放題になってしまうので、所有者をどう説得するかが課題だと思います。

[委員長]

林業組合長に話を聞いたときに、組合でもいろいろ考えているらしいのですが、そこに集まっている人は、みんな山の所有者です。所有者の考える利用方法と、外からの視点による利用方法があって、所有者が生物多様性を考えることは、あまりないと思います。ここが難しいところです。

[A委員]

この話を山の所有者にそのまま伝えてもピンとこないと思います。むしろ、所有者にとっては、事業を行うことでどのくらいの利益が得られるのかが大事であって、そこが明確になればすぐにでも人は集まってくると思います。林業で生活が成り立たないから、里山が荒れてしまうわけです。

[委員長]

そこが一番の問題です。山の所有者にとってもまず生活が第一ですから、それを差し置いて生物多様性を考えろと言っても無理だと思います。E委員の話によく共感する部分があったと思いますが、それはE委員の生活の中から出てくる非常にリアルな話だからです。あと、F委員に伺いますが、もし高齢者を里山に連れて行くとしたら、もう少し整備されていないと厳しいでしょうか。

[議長]

先日、私が所属しているグループで、飯高檀林へ散歩に行ってきました。半身不随の人もいましたが、駐車場から歩いて講堂まで行き、ガイドの案内を聞いて、再度戻ってくるという大体1時間くらいの行程でした。不便ではありましたが、整備されたなだらかな道を歩くより、あえてその不便さを楽しむという感じで最後まで歩き通せると、それが本人の自信につながったりします。

[A委員]

飯高檀林のような場所は、あまり整備されてしまうと魅力が半減しています。目に見える場所にごみがないというのも重要です。

[委員長]

歩道などの人工物は、なるべく造らない方がいいと思います。ただ、里山の中は人工的に手を入れないと再生できません。以前、E委員が言っていましたが、山を整備するとヤマユリが咲くようになるそうです。都会から農業体験に来るような人は、山を歩いていてヤマユリを見かけたら感動すると思います。

[A委員]

車では気づきにくいですが、バイクに乗っていると、香りで近くに花が咲いているかどうかわかります。

[B委員]

整備されないことで光が入ってこないと、咲いているかどうかもわからなくなってしまいます。

[A委員]

あまりにも暗すぎると、ごみ捨て場にされてしまう危険性もあります。だからといって除草剤をかけてしまうと、ヤマユリも含めてみんな枯れてしまいます。

[B委員]

知人の農家が斜面を刈るときには、ヤマユリの茎を残して刈るそうです。

[委員長]

ボランティアなどで里山に入っていくと、そういう自然のあり方を学べるのも一つの魅力だと思います。

[A委員]

ボランティアの方が、竹や林の整備をやってくれるといいのですが。

[委員長]

困り物の竹ですが、炭以外で何か利用方法はありますか。

[A委員]

タケノコはいかがですか。ただ、タケノコも難しく、ただ間引けばいいということではなく、坪あたりの本数や成育年数にも影響してくるそうです。飯高檀林の周辺では大きくて良いタケノコが採れるそうですが、先日、E委員に頂いて食べましたが、採れたてでしたので非常においしかったです。

[委員長]

私も頂いて、アルミホイルに巻き焼いて食べましたが、とてもおいしいですよ。

[議長]

こう考えると、市内にも良い物はたくさんあるような気がします。先日、歩こう会というサークルに参加している70歳の方に話を聞いたのですが、散歩の楽しみは歩くことより、歩いた結果、きれいな花やおいしい物に巡り会えることだそうです。飯高檀林では片道約10分ぐらいの距離ですが、散歩をするには少し短い気がするので、コース設定を考えなければなりません。ちなみに、歩こう会のような団体は、全国にたくさんあるそうです。

[委員長]

地元の生活や生産に密着したものから、外の人も呼べるようなものが生まれると思います。新たな問題を一つ聞いてみたいのですが、本日議論しているようなことを踏まえて、飯高保育所は何か活用できないでしょうか。あくまで、保育所の利

用がメインではなく、里山、生活、産業などを全部含めて考える必要はあると思います。

[B委員]

こういう活動を総括するNPOなどが入るべきだと思います。既存の地元の会が中心となってNPOを立ち上げて、地元の資源を活用して農業体験などのいろいろなアクティビティをそろえることができればいいですね。市民でも飯高檀林を知らない人もいるわけですから、まずは都会の人うんぬんというより、地元の人を巻き込んでいって、市内で利用していくことを考えてもいいのではないのでしょうか。

[A委員]

やはり、市内でも線路より南に住んでいる人間としては、線路より北は別世界に感じます。

[委員長]

私も線路の南側に住んでいたのが同感で、これまで里山という意識は全くありませんでした。ただ、私が東京で匝瑳市の話をする、「テレビで匝瑳市を見たよ」という話を聞きますが、その時に出てくる話題としては地井さんと並んで巨木の話が出てきます。

[C委員]

先週NHKで放映されていましたが、日本の里山というシリーズがあり、巨木の話が出ていました。

[委員長]

最終報告は、生活や産業を含めたものを全てシステム化するような、そういうフレームワークを作りたいと思っています。すでに個々で努力して活動している人がいますので、それを全て組織化することはできませんが、緩やかに連携がとれるようなものができればと思っています。

[議長]

そういう人たちに声をかけて、自分たちがやりたいことをアピールしながら話を進めていった方がいいのでしょうか。

[委員長]

こういうことを考えるとき、真っ白なものから作図するのではなく、実際に活動している人たちをきっかけにして、そこから何か作り出していくしかないと思います。実態の中からは新しいものは生まれません。

[C委員]

市内に生産者は多いと思いますが、生産者だけが集まっても、生産した物の話題か

ら先に進みにくいと思います。作った物をどうアピールして、どう販売していくかということにつながりません。先日、銚子で私が指摘したことは、カツオの食べ方が2種類しかないということです。カツオはよく獲れますが、それをどう食べるかという工夫がありません。これをもっと広げていくしくみが必要なのではないのでしょうか。

[委員長]

野栄地区には農産加工場がけっこうありますが、全国的にみても経営規模の大きな農家が中心になってやっています。食糧の流れを川の流れに例えることができますが、川上、川中、川下とって、川上が生産者です。ふれあいパーク設立当初は、行政が支援していたと思いますが、現在は生産者が川中まで攻めてきているわけです。逆に企業の方も、契約栽培などで流通や生産まで手を伸ばしてきていますので、C委員の言われることはもっともだと思います。

[C委員]

消費者の立場で言えば、ふれあいパークで買う機会は、以前より少なくなってきました。商品が少なくなると、商品の回転も悪くなっています。生産者が減っているのか生産量が減っているのかわかりませんが、生産しても販売できない、いわゆるロス部分が置き去りにされている可能性はあります。

[委員長]

そういう部分をしっかり対応していくのが経営努力です。商店街の問題と同様で、成功している人たちはそれなりに努力をしていますから、やはり努力しない限り改善されないと思います。農協はなかなか流通から離れられませんが、農協でも先進的に進めているところは、生協と組んだりしていろいろやっています。今後、新たな展開が生まれるとしたら、農協の果たす役割は大きいと思います。かつて、旧野栄町では「野栄いきいき農業塾」という組織を作りました。その成果の一つがチューリップ祭りで、その他にも当時の生産農家が集まって地ビールの工場をつくろうとしたなど、いろいろな動きがありました。元々は野栄の農業問題を解決しようと生産者が集まった組織であったと思います。現在、新堀川沿いで組合を作って大きくやっている人たちがいますが、彼らは農業塾で中心的な役割を果たしていた人たちなのです。組織化は難しいと思いますが、それらの活動を今一度掘り起こして、緩やかに提携することでまちづくりに活かさないかと思っています。

[A委員]

昔、JAの青年部だった人の話では、農協で20年以上前に農業体験のような活動をやっていたそうです。都会から人を呼んで農業体験をさせて、地元のおいしいものを食べさせて帰ってもらうというツアーを企画していたそうです。

[委員長]

昔やっていたようなことを一度掘り起こしてみるといいと思います。なぜ失敗したのかということ把握した上で、現在の施策に活かせばいいのです。

[C委員]

現在、たばこ農家は減っていて、代わりに多くなっているのがネギと落花生です。砂地は落花生に適しています。

[A委員]

落花生が増えているのは、落花屋さんが機械や人手まで用意してくれるからです。畑だけ貸してもらえればできてしまうので、手間がかかりません。ただ、単位面積あたりの収益は非常に低いです。

[委員長]

戦後あちこちにでんぷん工場ができてサツマイモを作っていました。その次に作られたのがたばこでした。たばこも換金作物（現金収入を目的として作る農作物）で、農家にとっては大きな収入でした。今度はたばこがなくなって落花生ということですね。

[A委員]

国産落花生の70%が千葉県で作られています。千葉県の中でも北部だけの食べ方として、ゆで落花生があります。収穫したてのものをゆでて食べると非常においしいです。ただ、落花生には堆肥が使えないという問題があります。なぜなら、堆肥を使うと色が黒くなってしまうからです。

[委員長]

砂地で作る落花生は、八街産よりおいしいと聞いていますが。

[A委員]

ネギは連作がよくないので、間で落花生やトウモロコシを作る人は多いです。面積が確保できている農家は、ネギや落花生をローテーションで作っています。落花生は放置していても育つので、簡単に作ることができます。

[B委員]

地元でたくさん作るようになれば、落花生を使った商品なども作りやすいと思います。ちなみに、ネギを使ったB級グルメとかはありませんか。例えば、ひかりねぎとして出荷できないネギを使ったものとか、大浦ゴボウ、若潮牛などのブランドもありますよね。

[委員長]

若潮牛も地元ではほとんど販売されていないと思います。

[議長]

そういう実際に活動している人たちを、どうやって集めたらいいのでしょうか。

[委員長]

それは戦略会議の課題ではなく、次の段階で考えるべきだと思います。その際には、直接の関係者だけではなく、それを支える専門家や地域プランナーを入れた方がいいと思います。このときに、中間報告で提示したしくみを使えばいいわけです。

[C委員]

すでに大手の企業が生産者と直接契約を結び始めているので、早めに動かないと5億10億という市場は、あっという間に匝瑳市からなくなってしまうと思います。

[委員長]

先月、市内で聞き取り調査を行って感じましたが、農家の人はけっこういろいろなことを考えていて、やはり土が好きですよ。

[A委員]

土が好きではなかったら逃げ出したくなると思います。農家は9割が苦勞で、1割が楽しみです。その1割の楽しみのために頑張っているのです。放射能の影響で牛がだめになった畜産農家がありますが、その気持ちは農協や市場の人ではわからず、生産農家の人にしかわからないと思います。

[委員長]

工業製品は機械で大量生産できますが、農業はそうはいきません。そこに価値があるので農業体験などが成り立つのです。個人的には農業体験の中で、参加者に草取りをやらせてほしいと思っています。

[A委員]

食育活動の中で草取りもやらせていますが、子どもたちは草取りが好きです。自分たちで植えた物なので愛着がわき、休み時間に率先して草取りをやってくれるそうです。それも体験活動の成果だと思います。

[委員長]

いろいろ意見が出ていますが、行政から出されている課題の中で、旧米倉分校の利活用があります。何か利用できそうなものはありませんか。ここは産業とかで使うのは少し難しいと思います。

[議長]

私の職場では、障害者や高齢者が花を育てて販売をしています。種を植えることと水まきぐらいはできるので、花を育ててそれを里山に植えたりすれば、高齢者の活動の場にもなりますし、社会貢献にもつながると思います。

[B委員]

旧米倉分校の前を全部花畑にすればと思ったのですが、入口は道路から入っていく細い道だけで、裏からは入れないのですか。

[事務局]

裏からは入れません。

[委員長]

入口が非常にせまいことがネックですよ。

[議長]

最近福祉と園芸に注目が集まっていて、いろいろなところで研究会が開催されています。

[C委員]

成田では、リハビリと農業をむすびつけてやっているところがありますよね。

[委員長]

そういう活動の場として、旧米倉分校はいかがですか。

[議長]

交通手段があればどこへでも行けますし、何でもやるという人は多いです。交通手段さえ確保できれば問題なく使えると思います。こういう新しい取り組みを行うと人の目を引くので、こういう体験の場を見に行く観光ツアーを企画しているところもあります。山口県の施設では、高齢者や障害者に好きな仕事を選択させて、それを見に来る人で100人ぐらいの人が集まっているそうです。それも地元の観光協会や旅行会社と提携してツアーを組んでいます。

[委員長]

これは高齢者などが作ったものを見に来るのですか。それとも働いている現場を見に来るのですか。

[議長]

働いている現場を見に来ていて、どういうしくみで事業が成り立っているのかを視察しています。視察がツアーになっていて、せっかく来たわけですから市内の観光もしてもらって、ついでに旅行もしてもらおうという企画です。

[委員長]

これは建物の近くに農地がなくてもできますか。

[議長]

問題ないと思います。これは施設でやっていることですから、活動している姿を見ることができればいいのです。ただ、職員の確保や配置などが難しいですが、もしボ

ランティアの人たちの力を借りることができれば実現可能だと思います。

[委員長]

これを里山につなげることはできませんか。

[議長]

やはり交通アクセスの問題があります。障害者は厳しいかもしれませんが、高齢者については元気な人が多いので、料理でも何でもできると思います。高齢者だからといって役割をどんどん奪ってしまうことが、老化につながる原因になってしまうので、普通に生活し続けることが体の機能を落とさず、長生きする秘けつです。

[委員長]

E委員が欠席なのでわかりませんが、飯高で地元の名物料理とかはないのでしょうか。山菜もたくさん採れますよね。

[B委員]

この地域の人には山菜をあまり食べませんよね。山菜を食べなくても春先は食べる物がたくさんあるわけです。

[A委員]

真冬でも野菜が収穫できます。食べ物に困っていると、いろいろな物をどうやって食べようかとあれこれ考えて工夫しますが、この地域の人には食べ物にあまり困っていないので、そういう発想があまりないのかもしれませんが。

[委員長]

信州では米が作れないから蕎麦を作っていたわけですが、今はそれがウリになっていますよね。山で採れるものが何かウリになりませんか。

[C委員]

ここ数年、多古町ではヤマトイモをたくさん作り始めていますよね。

[A委員]

元々、山田や栗源で作っているのですが、土地がなくなってきたので多古町に土地を求めているのです。

[C委員]

ここ数年で、多古町のヤマトイモは一気に有名になってしまいましたよね。

[A委員]

セブンイレブンの蕎麦に使うということで、多古町のヤマトイモはセブンイレブンと契約していますよね。ただ、契約栽培というのも難しく、最初は企業も高く買い取りますが、数年すると徐々に買い取り価格が下げられてしまいます。15年くらい前は、セブンイレブンの肉まんに、ひかりねぎが使われていました。しかし、企業も生産者

もお互いに採算が合わなくなってきてしまって、使わなくなってしまいました。

[委員長]

大浦ゴボウは山の中に生えているわけではありませんよね。

[B委員]

大浦地区で栽培されているものです。

[A委員]

栽培するのが大変難しいようです。大浦で思い出しましたが、落花生の特産品で「おおまさり」という非常に大きな新品種があります。これは生落花生専用で、数が少ないので都内の料亭などに出荷されています。

[委員長]

どのくらいの大きさなのですか。

[A委員]

粒の大きさが、普通の落花生の殻と同じくらいです。

[委員長]

戦略会議発足当初から考えていたことですが、北の里山、南の海岸、そしてその中心に商店街があって、ここで何か交流ができないでしょうか。海岸地域にも海産物などを大規模に経営しているところはありますが、あまりこういうことには興味がないのでしょうか。

[事務局]

営業レベルが全く違うと思います。やはり商売にならないと興味を示さないと思います。こういうことを始めるときに、最初は赤字覚悟で挑戦してくれる人をどう抱き込んでいくかが重要だと思います。

[委員長]

現在、商店街に空き地ができていますよね。やはり街の景観として良くありません。こういう場所に八日市のようなものがないかと思っているのですが。A委員は農具を加瀬金物店で買ったりしませんか。

[A委員]

私は農機具屋で購入しますが、そのお店にしか売っていない物があって、一度だけ親と一緒に買いに行った記憶があります。

[委員長]

この店の物が良いということで、買っている農家の人はけっこういますよね。こういうお店は残していきたいと思っています。

[議長]

終わりの時間も迫っていますので、そろそろまとめに入りたいと思います。

まず、市外に目を向けるより、匝瑳地域内で農業や福祉などが連携して域内の資源を有効活用し、全体がつながるようなしくみを作ることができればと思いますが、これを実際に指導していくのは戦略会議の次の段階ということでしょうか。

[委員長]

そう思います。その際には、農業や里山などの直接の関係者だけではなく、それを支える専門家や地域プランナーを入れた方がいいと思います。

[議長]

それは市が行うべきことなんでしょうか。前回の話ですと、E委員の会のような既存の団体を中心に組織化して、やってもらおうという意見が出ていたと思いますが。

[委員長]

そういう重要な役割を果たすものを作るとしたら、先ほど言った農業塾のようなものを法人化し、組織化して取り組んでいかないと、E委員がいくら一人で頑張っても動きが起りません。そういうことを集約して、中心となって行政や市民に訴えかける組織がないと難しいと思います。

[A委員]

E委員みたいに、情熱を持っている人はたくさんいると思います。ただ、実際に動くとなると、周りに同じ思いの人が5人ぐらいいないとできません。この5人が10人となり、10人が20人と増えていくのです。E委員のように何かやりたいと思ったときに、同じような志を持った人が集まれる場、マッチングできる場があれば、自分たちでおのずと発展していくのではないかと思います。

[委員長]

これは行政へのお願いですが、例えばそういう場を作るとき、事務局が事務的に資料を印刷して配るだけではなく、立ち上げ当初から積極的に参加しながら関わっていくスタンスで臨んでほしいと思います。そういう人が行政に必要だと思います。

[A委員]

参加型の事務局であってほしいと思います。

[事務局]

行政が関わるとなると難しい部分もあります。やはり、農協や専門知識のある人が中心になって、そこに市も参画していくようなかたちであれば実現できそうな気がします。

[委員長]

もう一步踏み込むことはできませんか。行政の若手職員が市民の中に入り込んで、

熱意を持って説得して回るというのは非常に効果があると思います。

[C委員]

あるいはふれあいパークのようなやり方も一つの方法で、行政が50%出資して、残りの50%はやる気のある人を株主として集めてしまおうという方法もあります。その方が動きやすいということもあるかもしれません。

[委員長]

ただ、農業塾のような組織を作ったときに、経営の主体にするのではなく、匝瑳地域の農業のあり方を考えていくような指導又は研修を中心とした組織にした方がいいと思います。経営主体で考えると、何かしらのトラブルが起こる可能性があります。野菜いきいき農業塾も、地ビールの工場を造ろうとしたときに、変な方向に向かってしまったのではないのでしょうか。

[事務局]

農業塾は、元々四つのグループに分かれていました。生産、販売、環境など、会社と同じように四つのセクションに分けました。そのグループで堆肥工場なども研究しましたが、それは途中で挫折しまして、方向としてはチューリップ祭りに向かいました。これは環境部会が中心となったわけですが、野菜地区には独特のにおいがあるということで、花の香りでおいを消そうと思いましたが、それは難しいということになりました。そうであれば、チューリップ祭りをきっかけにして、町内を花いっぱいにして町をアピールしようと考えました。

[議長]

結局、農業塾でも何でも、そういうプラットフォームを誰が主導して、どのように作っていくのかが一つの課題ですよね。

[委員長]

当時の農業塾の関係者などに話を聞いてみると、E委員のような主体的契機はあるということですから、やはり行政が中に入っていくしかないと思います。

[議長]

私も行政が入ってくると、一番話がスムーズに進むのではないかと考えています。

[委員長]

今後のまちづくりを考えるときに、戦略会議で作ったフレームワークを基に、行政の若い職員が汚れ役になって市民の中に入っていきといいと思います。

[議長]

他の自治体では、マッチングだけを専門に担当する行政職員もいますよね。そこからどんどん新しい動きが出てくるので、そういう人が必要なのかもしれない。これ

は行政内部でぜひ検討していただければと思います。本日の結論としては、戦略会議でできることは、そのフレームワークの提案までということになると思います。他に意見がないようであれば、議事（１）についてはこれで終了したいと思います。続いて、議事（２）その他ですが、事務局から何かありますか。

（２）その他

[事務局]

事務連絡をさせていただきます。

まず、次回の戦略会議（全体会）については、事前に委員長と相談しまして、10月の第2週あたりで開催できればということでしたので、事務局案としては10月11日（木）がいいのではないかと考えているのですが、いかがでしょうか。

また、それを逆算していくと、10月11日に部会の検討結果を報告することになりますので、もし3回目の部会を開催することになれば、その日程も本日決定させていただきたいと思います。

[議長]

すでに結論は出ていますので、部会は本日で終了ということでもいいと思いますが、皆さんいかがですか。

[出席委員全員]

異議なし。

[事務局]

わかりました。では、本日までの議論を総括していただき、次回の戦略会議で部長に報告をお願いしたいと思います。

[委員長]

次回の戦略会議の日程についてですが、もう一週間遅らせて10月18日（木）にすることは可能でしょうか。

[事務局]

10月18日ですと、任期終了までに後1回しか会議を開催できないことになりますが、それでもよろしいですか。事務局としては、会議の場でなければ決められないこともあると思いますので、安全策をとって後2回開催できる日程を考えていたのですが、10月11日では準備が間に合わないということでしょうか。

[委員長]

次回の会議で、最終報告の骨格を提示して、11月の会議で素案を出す予定です。

[事務局]

次回会議が終わってから任期終了まで後1回しか会議を開催できないと思いますが、最終報告の提出は大丈夫でしょうか。

[委員長]

11月に完璧なかたちで最終報告が出せるかどうかはわかりませんが、次回の会議で提示する最終報告の骨格が決まれば、後はそれを文章化するだけなので、問題ないと思います。

[事務局]

委員の皆さんはいかがですか。最終報告の内容については、委員全員の了解が必要になるとと思いますが。

[委員長]

11月に会議を開催して、さらにもう一回、最終報告の内容を議論しなければならないときは、メールなどで連絡を取り合って、皆さんの承認を頂ければ問題ないと思います。

[事務局]

本日出席されている委員の皆さんがそれで問題ないということであれば、そのスケジュールで進みたいと思いますが、いかがでしょうか。

[委員長]

本日それを決定するのではなく、そのスケジュールについても次回の戦略会議で私が説明します。そこで皆さんの了解を取りたいと思います。もちろん、11月の会議までに、最終報告の完成原稿が提示できるよう準備を進めていきます。もちろん行政側の都合も配慮しますが、行政としては11月の会議で最終報告の完成原稿が提出できれば問題ないわけですよ。それには、次回の会議に提示する最終報告の骨格が全てだと思っています。

[事務局]

11月の会議で最終報告の素案が提示できなかつたり、内容の修正などが必要で確認作業に時間がかかたりする可能性も考えられるので、それを考慮した日程としては10月11日に開催した方がいいのではないかとというのが、先ほどの事務局の提案です。

[委員長]

次回の会議で骨格を提示したときに、その場で意見を出してもらって、修正があるとしたらそこで大きな枠組みについては修正すればいいのです。方向性さえ決まってしまうと、後は文章化するだけですから問題ありません。文章化したものを修正するだけであれば、それは皆さんの了解を頂いて、私と事務局で最後に調整すればいいと

思います。

[事務局]

では、次回の会議は10月18日ということによろしいでしょうか。

[出席委員全員]

異議なし。

[事務局]

それでは10月18日(木)ということで、この後9月14日に2回目の商店街復権部会が予定されていますので、そこで提案して日程を決めたいと思います。事務局からは以上です。

[議長]

それでは時間になりましたので、本日の会議はこれで終了となります。

[事務局]

ありがとうございました。

4 閉 会